京都文教大学臨床物語学研究センター主催　公開講演会

コロナを鎮める物語 ～妖怪文化を手がかりに～

講　師
河野　隼也（妖怪文化研究家・嵯峨美術大学芸術学部デザイン学科講師（当時））
司会・コーディネーター
山崎　　晶（本学総合社会学科准教授）

日時：2023 年 1 月 16 日（月）14:40 ～ 16:10
会場：京都文教大学　弘誓館G104 教室

山崎　では、始めたいと思います。コロナという私たちが全然経験したことのないような、いつ始まって、いつ終わるのか分からないような不安定な状況に対して、ここに出ている、あるいはここにいるアマビエという妖怪が発見され、そして、こんなのがいる、こういうのが疫病、流行り病をやっつけてくれるみたいな感じの話が出てきたわけですけれども、じゃあ、なぜ妖怪が、非科学的なものではなくて科学的なものを志向するというのが近代社会の在り方ですけれども、なぜ、こんなアマビエさんが今出てきたのかということで、そのあたりのお話を伺おうと思って今日は嵯峨美術大学にいらっしゃいます河野隼也先生をお招きしました。（拍手）わざわざ来ていただきまして、ありがとうございます。

河野先生と私がなぜつながったかを簡単にお話しをしますと、3回生の私のゼミで京都に関する雑誌を作るのですが、観光ガイドに載っていない京都を紹介する雑誌にしてほしいとお願いしていたら、京都のちょっと西のほう、北野天満宮の近くに大将軍商店街というところがありますが、ここが「妖怪ストリート」という、妖怪を使った商店街の活性化という取り組みをされていて、河野先生がそちらのプロデューサーを務めておられます。彼女たちが河野先生にインタビューしたということをきっかけに、今回来ていただきました。

今日、先生はわざわざ連れてきてくださったのですが、ご自身でもこうやってアマビエの造形をなさったり、あるいは今ここにグラフィックで出ていますけれども、こういうアマビエのグラフィックや他の妖怪のいろいろなものもお作りになっておられます。

では河野先生にご活動とかアマビエの話などをしていただこうと思います。よろしくお願いします。

河野　よろしくお願いします。ただ今ご紹介にあずかりました河野と申します。私、妖怪文化研究家というのと妖怪造形家というそういう肩書を勝手に自称していろいろな活動をしています。何かすごく怪しい肩書で何か(『ゲゲゲの鬼太郎』の)「ねずみ男」が詐欺働く時の名刺に書いてある肩書みたいなのですが、長らく2005年ぐらいから、先ほどもおっしゃっていただいた「妖怪ストリート」でまちおこしのイベントを始めて今に至るという感じです。

もともとは京都の嵯峨美術大学というところに在籍している学生時代から、京都はそういう歴史がある町ですから妖怪のお話などもたくさんありまして、本屋さんに行くと「京都魔界案内」みたいな京都のそういったお話を取り上げたような本がとても人気なのだけれども、それを観光利用しているという事例がなかったものですから、学生のころから「京都における妖怪の観光利用について」という研究をしていました。そして、その研究活動の一環としてさまざまな妖怪をテーマにしたまちおこしのイベントをしていたり、あと作家活動を取り組んで今に至るといった感じです。活動の大きなテーマとしたら妖怪とアートとイベントというのを活動の柱にしています。妖怪は非常に複雑な文化的背景があったりもするので、それをコンテンツとして扱うにおいては、やはりきちんとそういうのを研究しなければいけないというので妖怪のいろいろなことをインプットするために妖怪文化研究家というのを名乗っていて、そういったものを表現するにおいて妖怪造形家というのを名乗っていてインプットとアウトプットを両方しているという感じです。

作家活動もしていまして、これは、もしかしたら妖怪好きな人でお持ちという方もいてくださるかもしれませんが、2年ほど前に念願の『きみのとなりにいるリアル妖怪図鑑』(西東社）を出版しまして、ちょっとこれが一風変わった妖怪図鑑で、こういう普通の写真に妖怪が映り込んでしまったという、何か人工的に作った心霊写真のようなビジュアルを使って妖怪を紹介していくというそういう図鑑を作って出版していたりもしました。

先ほど何かコロナの時に、特に最初の辺は自宅にいなければいけないという期間がありましたが、そういう不安な状況でどうするかというお話がちょっと出たと思いますけれども、私は2020年の頭のコロナの在宅期間中はずっとこの図鑑の原稿をしていたので、もうちょっと長引いてくれないかなみたいなちょっと不謹慎なことを思いながらずっとこの作業をしていたといった感じです。

こういう作家活動をするそもそものきっかけになりましたのは、こちらです。皆さん、百鬼夜行という言葉聞いたことありますか。最近だとアニメの『呪術廻戦』で、京都で百鬼夜行を悪役がするというお話というふうに聞いたのですが、それは2005年からずっと私やっているのですが、そもそも百鬼夜行というものは鬼や天狗、あとは非業の死を遂げてしまった方が怨霊となって化けて出るとか、そういったことが信じられていた平安時代の京都で語られている当時の都市伝説のようなものです。さまざまな異形のものが都大路を夜中に行進するというものです。

こちらにある絵は通称「百鬼夜行

絵巻」と呼ばれるものの一部を抜粋したもので、実はこの絵自体は、多分見たことあるという方もおられるかもしれません。この絵は作者も確たるものは分からないし、作品のタイトルも実はありません。なので後世の人が勝手にこれは百鬼夜行のシーンを描いたのではないかということで百鬼夜行絵巻と言われているのですが、実はこれ自体にはタイトルがなくて何を描いたものかという確証はないというものです。こちらを見ていただきますと、多分日本史の教科書などでも見たことあると思いますけれども、昔の京都、平安京です。今でも京都市内はこんな感じで碁盤の目の町になっていて通りと通りの交差点が住所の代わりになるようなこともありますけれども、先ほど見ていただきました百鬼夜行、実は通り道がここだというふうにある程度特定をされています。その百鬼夜行の通り道とされているのが一番上の赤い線の場所、一条通りです。多分今、私たちは結構この辺の下の辺にいると思いますけれども、これが一条通りで北野天満宮がこの辺りです。金閣寺がこの辺りで、きのう駅伝やっていましたけれども、駅伝はこの辺りを走っていたという感じです。

この一条通り、平安京というのはこのように碁盤の目になっていて一番北側の東西に延びる通りが一条通り、二条、三条、四条、五条と下に行くほど数字が増えていくわけですけれども、一条通りというのは平安京の一番北の端っこに位置するわけです。

つまりこれはどういうことかというと、この一条通りよりも南側というのが住居等がある人の住む世界です。一条通りの北側、つまり平安京の外側というのは人ではない何者かが住まう世界というふうに考えられていたようです。今でいう妖怪的なものですね。なので、この一条通りというのは南側の人間と北側の妖怪が出会ってしまうというそういう場所だったのです。

妖怪、ある程度好きな人はもしかしたらご存じかもしれませんが、妖怪というものは出る場所というのは境界線というふうに言われています。2つの世界の境界線というものが人と妖怪が出会う場所とされています。例えば井戸から出てくるお化けの話というのを聞いたことがあると思いますが、井戸というのは地下の世界と地上の世界のまさに境界ですね。あと橋の上にも出るというそういうお話がありますが、橋も川を挟んで向こう側とこちら側、向こう岸とこちら岸の境界と言うこともできます。あとは辻です。辻というのは交差点のことです。2つの道が交差する交差点、この辻にもよく出ると言われています。

あとは場所的な条件だけではなくて時間的な条件、例えば黄昏時と言いますね。これは日中と夜の境目、日中というのは人間が活動する時間で夜というのは妖怪が活動する時間で、この境目に妖怪と人間が出会ってしまうと。あとは丑三つ時ですね。これは夜の朝の境界というふうに言われています。

この百鬼夜行があったとされる一条通り、ここは人間の世界と妖怪の世界の境界線上なので、そういう人間と妖怪が出会ってしまう場所であったと。実は百鬼夜行以外でもいろいろなお話があったりもしますので、またちょっと機会があればそう

いう話もさせていただけたらなと思います。

そして先ほど先生がおっしゃっていたうちの妖怪でまちおこしをしている妖怪ストリートはちょうど一条通りのこの辺りに位置するわけです。非常に切ない写真ですけれども、大売出しと出ているのですが、普段は非常に閑散とした商店街となっていて信号がないので車の抜け道になっているというような、そういう商店街です。どこにでもある小さなちょっとシャッター多めの商店街なのですが、ここで、その昔、百鬼夜行が通っていたという故事に由来してそれを再現するイベントというのを2005年からずっとやっています。今、前にいるアマビエ君のような妖怪たちをコロナ前は130人ぐらい集めて、この狭い通りを大行列するというイベントをずっとしています。多分1年間で商店街に来る人と同じくらいの数の人がこの日に来てくれていると思いますが、こんな感じで先ほどの写真がうそのように当日はごった返していて人口密度だけを言うと祇園の宵山と同じぐらい来ているというふうに言われたこともあります。こういう妖怪たちがこの中を行進していくというイベントです。

ちなみにこれに来たことあるという人はいますか。ありがとうございます。ちょっと遠いですけれども、ぜひ皆さん遊びに来ていただけたらと思います。実際来てもらえると妖怪の行列だけではなくていろいろなお客さんのリアクションを楽しむことができます。（スライドの写真を見ながら）結構こんな感じで妖怪大好きという子供がいれば、親が無理やり連れてきたという子供もいれば、すごく嫌な顔をしている地元の方がいたり、それでも頑張って勇気を出して一応ピースサインをしてみたという子供さんがいたり、あとは、これは地元の子供だと思いますけれども、完全に怯えきっていたりもします。今でこそ、もう10年以上やっているのでそこそこ知名度があって結構いろいろなところから来てくださるのですが、最初の2、3年というのは全く認知をされていなかったので、普通に近所の人が犬の散歩をしている時に妖怪の行列に行き会うということがあって犬が非常に吠えるというようなこともよくあったりもしました。

このイベントが2005年開始時のころから結構新聞などで取り上げていただけることが多くて結構いろいろなところに取り上げていただいています。今でも覚えていますけれども、一番最初に取り上げてきてくれたのは文春砲でおなじみの『週刊文春』が京都で妖怪行列というのを取り上げてくれた記事を書いてくれましたね。あとテレビでも結構取り上げてくれることがあって、結構タレントさんがロケで来てくれたりもします。これは去年か一昨年だったのですが、「T.M.Revolution」の西川貴教さんが来てくださって、僕はこの琵琶の中にその時は入っていました。そういうことがあったり、今は京都市の中学校の美術の教科書にこのように載せていただいているというぐらい京都でも結構認知をされているイベントになっています。

オールドメディアだけではなくて、こんな感じで当日の百鬼夜行の様子を写真で撮ってツイートしてくれた人のツイートがものすごくバズったりもして非常にSNSなどを使ってイベントの認知度がどんどん

高まっているという感じです。

この方は地元に住む写真家の方で、すごくかっこよく写真を撮っていただきました。ちなみにこれは2019年だからコロナの前です。確かこの時は『スターウォーズ・エピソード９』のPVが出るというので大騒ぎだったのですが、『スターウォーズ』よりもいいね数が多かったです。そういうことがあって僕がうんぬんではなくて非常に妖怪というものが世の中的に注目をされているという一個の指標になると思います。あとは学生の皆さんだと、もしかしたらこの人たちのファンの方もおられるかもしれませんが、「女王蜂」というバンドをご存じですか。女王蜂の『夜天』という曲のMVに出ている妖怪は僕が作った妖怪です。妖怪を派遣して百鬼夜行をするシーンを作ってもらいました。今、犬王という注目されている映画の声優さんとしても非常に活躍していらっしゃいますね。そういう感じでアーティストのミュージックビデオにも作ってもらえるぐらい、妖怪というと何か古いものというイメージがありますが、現在進行形でいろいろなところで人気であるということです。

大将軍商店街の百鬼夜行をきっかけとしていろいろなところから、うちにも妖怪来てほしいという依頼が来るようになりまして、これもちょっとここからだと遠いですけれども、嵐山は大体分かりますか、京都の北の西のほうにあるところですけれども、大宮と嵐山をつなぐ路面電車で嵐電という会社があるのですが、そこが夏場に「嵐電妖怪電車」という電車の中にうちの妖怪を入れ込んで、お客さんと同乗させるという、動くお化け屋敷というのがコンセプトのそういう催しをされています。

皆さんもお化け屋敷とか行ったことあると思いますけれども、お化け屋敷は大抵歩いていてお化けが出てわーっと逃げるのですが、これは密室にずっとお化けと閉じ込められてしまうのでYouTubeなどで「妖怪電車」で検索してもらうと車内が阿鼻叫喚地獄になっているという映像がたくさん出ると思います。非常に沿線の子供たちにも人気ですし、夏になるとこのために結構他府県から来てくださるファミリー層がいたりもします。

沿線では悪いことすると妖怪電車に乗せるよというのでしつけに使われていたりもします。その車内での様子がこんな感じです。（スライドを見せながら）完全によそを向かないように妖怪と正面で見せられている男の子がいたり、でも頑張ってピースするとか。この子は怖すぎて体が反っていたりもするのですが、中には妖怪大好きという子供たちがいたりもします。

この時はわれわれの妖怪を派遣するというだけではなくて、お客さんが妖怪の仮装をして車内に乗り込むと運賃が安くなるという妖怪割というサービスをしているので、こんな感じで自分で妖怪の格好をして乗り込んでくれる人たちもたくさんいます。なので、嵐電の沿線で参加型のイベントとして地域の人たちや他府県の妖怪好きの人たちも一緒に参加して妖怪を盛り上げていくといったイベントとしても成長しています。結構かわいい妖怪さんたちもたくさんいます。基本的に着替える場所などは用意していません。会場に更衣

室があるわけではないので、この人たちはどうやって会場まで来たのだろうというのが非常に疑問なのですが。あとワンちゃんなども無理やり参加させられていますけれども。

ここで妖怪の仮装で来てもらって一応写真を撮ってフェイスブックに掲載して「いいね」の数で優勝者を決めるという妖怪仮装コンテストをしています。これで優勝した人が次の年のポスターになりますという、そういうコンテストをしていて、この年は2017年だから2016年の優勝者の人がポスターになっているのですが、これは嵐電のOBの方が昔の駅員さんの衣装を着て参加したというものですけれども。

山崎　真ん中の方ですか。

河野　真ん中の方です。古い駅長の格好をしていますけれども。これも結構、運賃安くするのは難しいらしいです。公共料金なのですごくややこしいのですが、嵐電が頑張って説得して安く設定したというのがありますが、結構妖怪で仮装して参加できるというイベントもしていたりもします。

あとは滋賀県の三井寺というとても大きなお寺があるのですが、そこには鉄鼠（てっそ）というお坊さんがネズミの妖怪になってしまったというお話があって、その鉄鼠をマスコットキャラクターにした「三井寺妖怪ナイト」というイベントをしていたりもします。これは非常に広いお寺の境内をこんな感じで怪しくライトアップして各所にうちの妖怪を配置して、その間をお客さんが駆け抜けていくという肝試し型のイベントです。これもこんな感じで妖怪を見たらすぐダッシュ、みたいな感じですね。これも非常に盛り上がるのですが、大体この時に稼動するうちの妖怪は20体ぐらいです。お客さんが3日で7,000人来るので1日当たり2,000対20の人間と妖怪の比率になってしまうので、あまり肝試しにもならなくて今は人間の数が多過ぎるので妖怪の前に長蛇の列が出て一緒に写真撮るのを待つというそういう写真撮影大会のイベントになっていたりもします。そういう感じで京都以外でも妖怪のイベントでいろいろお呼びいただいたりもしているという感じです。

あと仮装のイベントだけではなくて、実は僕みたいに妖怪の作品を作っているという人は全国にたくさんおられます。いろいろなジャンルの作り手の方がおられてアクセサリーを作られる人や漫画を書く人やぬいぐるみを作る人などいろいろな種類の方がおられます。陶芸をする方とか。そういう人たちを集めてオリジナル妖怪グッズをお持ちいただいて、それを販売する妖怪手作り市、妖怪アートフリマ「モノノケ市」というイベントを主催していたりもします。

これもSNS等で非常に話題になって、実は仮装のイベントよりもモノノケ市が出張依頼されることがたくさんあって、結構変わったところだと東急ハンズ渋谷店さんにお呼ばれしてワンフロア全部貸し切ってモノノケ市をやったことがあって、ものすごく盛り上がってそのフロアの歴代売り上げ記録を更新するということがあって、当時のハンズの社長さんもすごく喜んでくれて、お正月のあいさつで、皆さんも渋谷ハンズのモノノケ市のようなオリジナリティのあるイベントをしましょうとあいさつするぐらいだったのです

が、社長がそんなことを言うので、その年は全国のハンズが「鬼太郎フェア」を始めてしまって以降このハンズのモノノケ市は大苦戦ということになってしまいましたが。そういう感じで今現在、仮装だけではなくていろいろなものづくりをしている方にとっても妖怪というのは人気のモチーフです。

山崎　手作りのものを売るアプリでも、妖怪は一つのジャンルですね。「Creema（クリーマ）」とか、あとちょっと変わったところでも「BOOTH（ブース）」などでも一つのジャンルを作っているように思います。

河野　そうですね。でも、なかなか普通の一般的な手作り市に出店者１名だけが妖怪を売っていてもなかなか売れないそうです。それはやはり厳しくて、やはりこういうのをたくさん集めて、こういうのが好きな人たちが集まるということが大事ですね。それと今は実は海外でも妖怪は非常に人気で、これは去年の私ですが、こちらはアメリカのニューメキシコ州にあるサンタフェという町の博物館です。州立サンタフェ国際民俗芸術博物館ということで、民芸品の博物館ですけれども、そこがアメリカで初の大規模な妖怪展をされまして、いろいろなところに日本の妖怪のモチーフが。これは大映映画の『妖怪百物語』ですね。四谷怪談のお岩さんの使っていた歌舞伎の仕掛けを展示していたり、これは宇和島の牛鬼を借りて展示していたりもします。

山崎　日本全国のを借りてきているのですね。

河野　借りてきてやっています。これは僕の作った青坊主君というもの、大きなオブジェなのですが、あとはうちの同じ妖怪をやっているメンバーの、これはちょっと見にくいですけれども、「百鬼夜行絵巻」の現代版を作っていて現代の道具がいろいろな妖怪に化けて行進しているというものを作っているのですが、これも作品として展示されたり。あとこれは博物館の所蔵だそうですが、幽霊画の掛け軸も展示していたりしています。博物館からの依頼で百物語を語っている動画を作って納品してほしいということでそういうのを作って納品していたりもしました。

そういうことで日本の妖怪やお化けというのは日本国内だけではなくて非常に海外的な注目も集めているというものですね。なぜ妖怪展をやろうと思ったのですかと、ここのキュレイターの方に尋ねたのですが、何年か前にお客さんをターゲットにアンケートを取って次の展覧会は何がいいですかと聞いたら日本の妖怪をやってほしいという意見が圧倒的に多かったらしくて、それでやられることになったそうです。

山崎　みなさん妖怪をどうやって知られたのでしょう。

河野　そうなんです。不思議で、なぜその人たちは妖怪に興味を持ったのですかと聞いたら、その方がおっしゃるには、このサンタフェという町は結構定年退職された方が住んで、そこで余生を楽しくアートで暮らすという町なのだそうです。結構年配の方が多くて、そういう方たちの中ですごく大人気なのが浮世絵なのだそうです。

山崎　浮世絵から妖怪に。

河野　歌川国芳や葛飾北斎などああいう人たちの作品の中に非常に妖怪的なモチーフを使ったものがものすごく多くて、そういったものをカテゴラ

イズして展示するということが今までなかったと。なので、それをやってほしいという意見と、あとは若年層の人は妖怪をポケモンの祖先だといって。なのでポケモン的な感覚でいろいろな妖怪を集めて楽しむという人たちがいたり、あとはミドル層、中年ぐらいの人はスタジオジブリの影響が強いですね。なので、結構ポップカルチャー、浮世絵や『ポケモン』やアニメといったところが入り口になって結構妖怪に興味を持ってくれる外国の方が増えているという感じです。

結構国内でも海外でもこんな感じで妖怪は注目いただいていろいろなところで展開をしていたのですが、残念ながらコロナでいったん全部ストップしてしまうということがありまして。コロナが最初はちょうど2020年で、5月に先ほどのモノノケ市というのを企画していたのですが、2月ぐらいからどうも疫病がはやって集客イベントができないというふうになって、正直ちょっとイベントを多くし過ぎて疲弊をしていたので、ちょっと1回ぐらい休めるのはいいかなと思ったのですが、まさかこれがそんなに長く続くとは思ってなくて、モノノケ市に出してくれるという作家さんたちにも、ちょっとすみませんけれども、このご時世なので無理です、ごめんなさいというふうに謝ったら、その作家さんたちが……。

これですね。これがアマビエの原画です。皆さん、ご存じですか。これはどういう話かというと、江戸時代の中期ぐらいに熊本県の沖のほうの海中で何か光るものが出るという通報があったので、お役人さんが船に乗って確認しに行ったところ海中からこのようなものが出てきて私の名前はアマビエですと。これから6年の間は豊作は続くだろう。だが、もし疫病がはやったならば私の姿を絵に描いてそれを掲げなさいというようなことを言い残してまた海中に去っていったというのがお話として瓦版に載ったというこれだけの記述です。

でも、アマビエは妖怪が好きな人の間ではそこそこ有名な、非常に有名というわけでもないのですが、そこそこ有名なやつで。というのは何か予言をして疫病がはやるなり何なり悪いことがあったら私の絵を描いて掲げなさいというやつはいっぱいいるのです。予言獣というやつ。

山崎　いっぱいいるのですか。

河野　いっぱいいます。例えば件（くだん）という顔が人間で体が牛というのが結構有名で件というのがいます。あとは「天彦」というのがいます。天国の天に彦根の彦でアマビコですね。

山崎　じゃあ男の人ですか。

河野　それも3本足のお猿さんみたいなやつで、多分ですけれども、アマビエは絵も下手じゃないですか。字も下手なのです。

山崎　読めないですね。

河野　エとコを間違えたのではないかという説があります。アマビコと書いたのをアマビエと書いたと。アマビエというのは何か日本語の感じとしても気持ち悪くないですか。なので、多分アマビコだと思うのだけれども、奇跡的に名前も間違えられて絵もすごく下手ということでなごむというので人気のキャラクターだったのです。そのモノノケ市に出すような妖怪の作家さんたちがコロナ禍で何もやることがないからこういう

時はアマビエの伝承に従ってみんなでアマビエの絵を描こうと言ってアマビエの絵を描いてツイッターで流し始めたのが朝の情報番組がそれを嗅ぎつけて番組で取り上げられて、それがきっかけであれよあれよという間にどんどん広まって有名になったというのがアマビエ騒動の一つのからくりです。

そういう感じで、最近、時代劇などにもアマビエは出てくるのです。大河ドラマにもアマビエが出てきて、渋沢栄一の大河ドラマがありましたけれども、あれにもアマビエのお札をこうやって拝んでいるのですが、100％絶対にそんなことはなかったはずなのですね。瓦版でほんのちょっと出てきたというだけのものなので。またアマビエのお札が見つかりましたということを言うお寺さんなどが出てきていたりもするのですが、非常にこれにそっくりの絵なのですが、江戸時代にトレース台でもなかったら絶対にそんなお札は作れないので、それ、本当なの？ということがあったり、何かものすごく由緒が怪しいのにどんどん神格化をされていってしまっている感じがあったりもしますね。

あとは広告代理店がアマビエの商標登録を取ろうとしてそれが阻止されるというようなこともありましたが、そういったいろいろな思惑とは別にアマビエのゆるキャラ然としたフォルムは非常に人気になっていろいろなところで散見されるようになるのですが、先ほども言いましたけれども、アメリカの展示会でも早速アマビエコーナーを作ってこの難を逃れようというふうにされています。こちらは僕が作ったアマビエのお札で、これは水木先生が作られたアマビエ……。

山崎　水木しげるさんですね。

河野　あとちょっと分かりにくいですが、彫刻を作る人がいたり、あとはこれはかまくら、雪で作ったアマビエがあったり。

コロナ禍が始まってすぐに実はアメリカとスペインの新聞社から取材の依頼がありまして、こんな大変な時に日本人はなぜこんなものを描いて喜んでいるのですかという質問だったのです。海外の日本のイメージは、どちらかというと科学の国というイメージで論理的、理性的にやっていくというイメージだったみたいで、そんな昔の妖怪を引っ張りだして、その絵をみんなで描くというのがものすごく奇異に映ったみたいなのです。そういうことで、なぜそういうのを日本人はしているのですかと言われたので、ちょっと心の余裕を保つために昔のお話にすがって絵を描くことが疫病を封じることにつながるという一応解釈なのです。なので、それをすることによって、本当に疫病が収まるとは思っていないけれども、何か気持ちが落ち着くのではないかというふうに返答したのですが。（この写真は）去年の５月にアメリカの博物館まで行ったのですが、たまたまそこのスーパーマーケットに行ったところの駐車場に停まっていた車なのですが、わが国のアマビエがアメリカでステッカーとして販売されていて車に貼られるというようなことがあって「何か遠いところに旅立ったな」という。

山崎　アマビエすごいところに出張していますね。

河野　だから感覚としたら全然無名の漫才コンビが「Ｍ－１」で優勝して一

気に有名になったみたいな感覚ですという感じで、何かそういったいろいろな事情を差し引いてアマビエ自体がどんどん独り歩きして有名になっていっているという感じですね。

私も自分でアマビエを作ったりもしています。最初にみんながアマビエを描き始めた時に多分、今アマビエを作らないとこの先一生作ることないなと思って。多分コロナが終わって２～３年たったら「何だっけコイツ、名前思い出せないけれども、何だっけ」ということになると思うのです。なので、今作らないと多分作らないなと思って、一応コロナウイルス退散とかというのを作ってお札にしたり、こういうビジュアルにしたりもしました。

あとは、なぜコイツの絵を描いたらコロナが収まるのだろうというその合理的な説明が一切なかったので、じゃあ、実際はこういうことだろうということでアマビエとコロナウイルスが闘っているビジュアルなども作って……。

山崎　これはコロナさんですか。

河野　コロナウイルスですね。これを作って実際に物理的にこうやってやっつけているのだというようなものを作って、この出来が個人的に結構気に入ったので架空のファミコンソフトにしてゲーム画面を作って遊んだりもしていました。

山崎　これ、プレイはできないのですか。

河野　プレイはできないです。ビジュアルを作っただけですから。これをツイッターなどで流していたら福知山の大江山というところに「酒呑童子」という鬼の伝説がある山があって、そこに「鬼の博物館」というのがありますけれども、そこがアマビエ展をやりたいので、このビジュアルを展示してくださいというのでちょっと博物館に納品したりもしていました。そういうことで、心の平静を保つためにこうやってアマビエを作って遊んだりもしていて皆さんに今見ていただいているこのアマビエ君もその時の勢いに任せて作ったものです。

うちは毎年、京都市動物園で「妖怪ナイト」というイベントをしていて夜間開演の時にこういう妖怪を徘徊させたりして、子供たちが動物と妖怪どちらを見ていいか分からないというふうになるのですが、その動物園の人たちにアマビエを貸し出ししたところ、MK タクシーに乗せて連れていってくれたのでという感じで。

山崎　MK は何でも乗せてくれるのですね。この間京都水族館のオオサンショウウオを乗せたタクシーを見かけましたよ。

河野　すごいですね。NG なしですね。素晴らしいですね。

そういうことでアマビエを作って何とか心の平静を保つというか、アマビエを描くことによって疫病が何とかなるというストーリーを自ら描くことでそのストーリーに参加していたのではないかというのが僕の見解なのですが、アマビエという存在は皆さん的にどう映っているのでしょうか。どうでしょうね。

山崎　皆さん、どうでしょうね。アマビエ知っていますか。アマビエ初めて見たという人いますか。

河野　名前も聞いたことないですか。そうですか。

山崎　じゃあ、今日初対面ですね。これはかなりリアルな感じのアマビエさんだけれども、ググって画像検索するとサンリオのキャラクターみたいな感じでポップなのがたくさんい

らっしゃいます。

河野　アマビエはみんなが作っていますからね。

そういうことで、コロナでいったんうちの妖怪のイベントは止まってしまったのですが、その後SNSを活用してリモートで擬似的に妖怪仮装行列をするというようなこともしています。

山崎　このあたりから私も実はフォローさせてもらっていて、SNSでこんなことできるんだなととてもびっくりした記憶があります。みんなでSNSでモノノケ市とかされていましたよね。ツイッターに私、こんな作品出していますと。そして私の作品を買いたかったら、このサイトに飛んでくださいねとURLが貼ってあって、そこに飛ぶと簡単に買い物ができるというそういうシステムが作られていて、家にいて、しかもよくある同人イベントだとWebサイト上に仮想の会場があって、自分のアバターでそれぞれのブースに行ったりするというようなサービスをやったりすることがあるのですが、そういうのがなくても何かそれなりに楽しめるのだなということを発見したすごく新鮮な経験でした。

河野　いろいろなイベントをやっている人たちがコロナで全然そういうのが全く開催できなくなっていろいろな試行錯誤をして頑張っていまして、例えばお化け屋敷を毎年やっていた会社があるのですが、お化け屋敷は絶対駄目ですね。密室空間で叫びまくる、超3密空間になるので絶対無理なのですが、その人たちが考えた秘策がすごくて、都内の雑居ビルを利用するのです。参加者は車で来てもらって入り口のところでBluetoothのラジオを渡すのです。駐車場で停めてBluetoothをオンにすると恐怖のストーリーが聞こえてきて、この雑居ビルがいろいろなことがあってお化けが出ると。今からクラクションを3回鳴らしたらお化けが出ますと流れてきてクラクションをバーッと鳴らしたら血だらけのお化けがわーっと出てきて車にぼんぼん張りついたりして一定時間、10分なら10分やって終了で、あと終わったら血だらけになった車をお化けが洗車してくれて送り出してくれるというのをやっていて、これはただでは転ばないなという感じで。

僕はお化け屋敷もやったりするのですが、お化け屋敷は時間を読むのがすごく難しいのです。お客さんが入って怖くて動けなくなったりすると後ろの人を入れられないのです。それで考えると、このドライブスルーお化け屋敷は時間が完全にきちっと仕切れて終わるし、ルートもこのルート、これだけ歩かさなければいけないとかというのもやらずにできるのでドライブスルーお化け屋敷は多分コロナ終わった後も続いていくことになると思うのですが。

山崎　ディズニーランドなどでよくある車に乗って進んでいく、逆バージョンみたいな感じ。

河野　そうですね。あとは自家用車を使うということで自分の日常にお化けが入ってきた感じもするので。

山崎　より日常感といいますか。

河野　そういうことでコロナになってもしぶとくきちんとやっているところが多くて。うちも、だから本当は100人規模で人を集めていつもやっているのですが、それができなくなったということでリモートでやっていて、それをちょっと見てもらいたいのですが。

山崎　先ほどのドライブスルーのお化け屋敷はお化けにとっても都合がいいわけですね。

河野　お化けにとっても都合いいです。

山崎　私、お化け屋敷のお化けと同じように白塗りして舞台に立つということをやっていたのですが、結構白塗りはあちこちにつくと落としにくいのです。車の中からきゃーっと言ってもらう分には汚れなくいいなと思いました。

フロアの皆さんは河野先生の質問等々、河野先生は怪談や怖い話をみんなで語ろうというイベントもなさっているので、そういうお話でも構いません。

河野　怪談をこの１年ぐらいコロナになってから始めたのですが、ライブハウスなどでミュージシャンがライブをできなくて怪談語りするというのが非常に増えました。わーっとか言わないですよね。こっそり怪談話すのをみんなが静かに聞いているというので、それで怪談、一大ブームになったのですが。

山崎　非常にシュールですよね。ライブハウス「GATTACA（ガタカ）」のイベントとか私､びっくりしました。ライブハウスでひたすらシーンとしているのって意外ですよね。

河野　ここから見ていただくのはコロナ禍中に一応頑張って、妖怪の仮装行列がなかなか集まってすることができないので、ツイッター上でそれぞれ妖怪の仮装をしてもらって、それを審査員を招いてコンテスト形式にして優勝者を決めようという、そういう催しにシフトチェンジして妖怪仮装コンテスト「百鬼夜王」というのをこの時に始めました。ちょうどハロウィンの時期にこれをやろうということで百鬼夜行の王を決めるということでこういう妖怪感とか造形レベルといった基準を設けていろいろな人に投稿してもらって決めると。こんな感じの人たちがいっぱいツイッター上に妖怪の仮装をした写真をアップしてくれるのです。

山崎　これは事前にエントリーとかあるのですか。

河野　これは百鬼夜王のハッシュタグを付けて画像をツイートしてもらったら誰でも参加ができるというものです。

山崎　エントリーする必要がないということでだいぶ参加のハードルが下がりますね。

河野　（スライドで写真を見せながら）こういう人がいたり、こんなヘビ持って来られても現場では困るのですが、こういう人たちとか。

山崎　これは全部皆さんが作られたのですか。

河野　基本的に自分の手作りのものです。中にはきちんとアマビエ、これは背景と合成しているものですけれども。この人は現役学生で卒業式もこのアマビエで臨んだそうです。

山崎　すごいですね。じゃあ、卒業制作みたいな感じなのかな。すごいな。

河野　それでうちの仮装コンテストに参加してくれて、こんな感じの子供たちがコロナで外に遊びに行けないので親御さんと一緒に衣装を作ってという形で参加してくれたりもしますね。こういうのはどこで写真撮ったのだろうと思うのですが。行列と違ってこういうロケーションなどもこだわって写真撮ったりもできるので、これはこれで別のジャンルのものとしてもなかなか。

山崎　写真の一つのジャンルとしても面白いですね。新しい。

河野　こういう感じのもいれば。これも

結構面白い。

山崎　これはいいですね。家族ですね。これは何ですか。この妖怪は。

河野　これはカマイタチですね。カマイタチというのは聞いたことありますね。普通に過ごしていて、どこか引っかけたわけでもないのに切り傷があったりすると。それはカマイタチのしわざだというふうに昔の人は解釈していて、よく手が鎌になっているイタチの絵は見たことあると思いますが、そのタイプともう一つ３人１組のカマイタチチームの話があって、それがこの人たちです。きちんとフォーメーションを組んで、まず一番最初のやつが足を引っかけて転ばす。次のやつが鎌で切る。最後のこの壺を持っているやつが、これが薬なのです。切った後にきちんと止血の薬を塗ってあげるという。

山崎　いい人ですね。

河野　「じゃあ、何で切るんだ」という感じなのですが、この３人１組でフォーメーションでやることによって、切られているけれども、血は出ていないということをするというお話があるので、親子のこのカマイタチの３人組をやったという感じです。でも、かなり本格的にやっていますね。

山崎　すごく首の辺りとかリアルといいますか。本物に会ったことないですけれども。

河野　ちゃんと鎌も作っていますからね。こうやって子供に衣装を着せて。

山崎　こちらはペットとのコラボレーションですね。ペットのポージングがいいですね。

河野　ペットも完全に巻き込まれてしまってかわいそうですけれども。こんな感じでやっていたり。またこういう和風テイストのビジュアル系みたいな人も多いですね。きちんとこういう設定も自分で考えて、ここにあるのは先ほどのカマイタチみたいにきちんと元のお話があるものもいればオリジナルで設定を考えたりという人たちもいますね。

山崎　こういうふうに作りましたというコメントが付いているのも興味深いですね。

河野　なので、ハロウィンというと今はコスプレイベントと大差ないものになってしまいましたが、きちんとこのお化けということでやっているというのもきちんと本来のハロウィン的な意義もあって面白いと思うんですけれども。こういうのもありますね。すごいですね。

山崎　これは誰でしょうね。

河野　これは、実は身内で僕が作り方の製法を教えたところ、かなり独自に進化させて自分の作風に取り込んだという人です。すごく『ドラクエ』的な感じで。

山崎　ラスボスっぽい感じがします。これも面白いですね。

河野　ちょうど『どうぶつの森』がはやっていたのでどうぶつの森の住人みたいですが。これも相当クオリティーが高いですね。服もあえて普通の洋服にするというのも面白いですね。

山崎　いくらでも画像で加工して作れるところをあえて一部分をきちんと作っているという、リアルなものでやるというところに皆さんのこだわりをすごく感じます。

河野　こんな細かいところは実際の仮装行列などでは見たりできないですからね。人がたくさんごった返しているところなので。これもちょっと怖いですね。

山崎　これは審査の結果はどうやって出るのですか。

河野　審査の結果は私がツイートをしますということで。審査結果は一応審査員3人集めて最後まできちんと公平に審査するという感じです。

山崎　それもオンラインでされたのですか。

河野　オンラインで会議してやりました。

山崎　すごい。全部オンライン。

河野　だから案外コロナになってリモート会議なども増えたので、これだったら実際に行かなくても確かにいいなというのがあったので、コロナで嫌なこととか悪いことはたくさんあったけれども、その中で発見したいいことは引き続いてその後もやっていけたらいいなと思うので。これ、いいですね。ロックバンドだそうです。

山崎　一瞬ニューロティカかと思った。

河野　先ほど言っていたドライブインお化け屋敷も多分継続して行われることになると思うのですが。

山崎　ロックの人多いですね。どうしたの、ロックの人たち。

河野　ビジュアル系の、やはりハロウィンなどの影響で仮装して舞台に立つみたいなことが結構あるのではないでしょうか。今でもハロウィンロックフェスみたいなのをやっていますね。「L'Arc ～ en ～ Ciel（ラルクアンシエル）」の hyde（ハイド）さんが主催してやられてたりもするので。

そういうことで、コロナでも一応全部がストップするわけではなくて、その中でもやれることを頑張ってやっていくという形で活動を継続していたという感じですね。

山崎　ありがとうございます。コロナの中で妖怪の好きな人たちが、妖怪はもともと何かいろいろな伝承とかそういうものを探してきて、こんな妖怪かっこいいよなというふうに見つけて自分なりに立体にしてみたりイラストにしてみたり物を作ってみたりということをされていると打ち合わせの時にお話を伺って、何かのメディアによる情報の中で自分が面白いなと思ったものを引っ張りだしてくるというそういう作業が一つあるのだろうというふうに思いました。

でも妖怪のお話はほとんど物語ですね。先ほどのアマビエの瓦版も言ってみればうわさ話なので、そうやって物語を作り出してアマビエというのがいてと、私の絵を描いたら疫病やっつけてやるみたいな、そんな話を聞いたよという、そういう瓦版だったと思うのですが、そうやって物語を作ったり、あるいは物語を聞いて、ああ、そうかといって本当に当時、これは明治維新のちょっと手前なので江戸の終わりですから恐らく筆記具なども割と豊富にあって、絵を描く人も、ほんの少数かもしれないけれども、いたかもしれないなみたいなことを考えていたのですが、実際そうやって物語にすがるというところが側面としてあったのではないかというふうにお話を聞いていて思いました。

社会学概論の受講生の皆さんには12月の最後の授業でコロナの自粛期間中に皆さんの心を支えていたものは何ですかという質問をしたかと思います。その中で一番よく挙がってきたのは一つはビデオ通話でした。ビデオ通話あるいはオンラインゲームで通話しながら友達とやっていましたというのがすごく多かったです。でも、ゲームはやる人、やらない人が結構出てくるので、その票を除くと、その次に出てきたのは何かというと「Netflix」あるいはドラマでした。ドラマや映画。つまり物語だったのです。なぜ物語で時間を一

人で、おうちにいなければいけないというしんどい時間を過ごしていたのかということをちょっと考えていたのですが、やはり非日常的なものにちょっと気持ちを飛ばすということで目の前にある、家にいなければいけないとか外に出て感染したら大変というそのプレッシャーのようなものというのがちょっとでもよその世界へ頭を移すこと、思考を移すことによって皆さん、しんどい時間を過ごしていたのかなというふうに拝見していました。だからこのアマビエを最初に描いた人たちのやっていることとあんまり変わらないこと、もちろん妖怪ではないけれども、他の物語にすがって皆さん過ごしてこられたのかなというふうに思います。

あるいはペットのブームというのもありますね。私もたまたまコロナの時にタイミングが合ったのですが、猫がうちにやってきたのです。そしたら猫は何を考えているか分からないから、取りあえずこちらで読み取るのですね。これはある意味、物語を作る作業だと思うのです。ペットに癒されていましたという人たちも、ある意味ペットと自分の中でのコミュニケーション、ちょっと留保が要りますけれども、コミュニケーションという物語を作り出すということによってしんどい日々を過ごしていたのかなというふうに思いました。

河野　妖怪とかいろいろな山にはこういうやつがいて海にはこういうやつがいてというふうに自然の中に存在を見出していくというのは多分自然とコミュニケーションを取りたかった日本人の知恵だったような気もするので、何か先ほどおっしゃっていたように猫ちゃんとコミュニケーションを取る中で物語を自分の中で作るというのは、妖怪の物語というのは、もしかしたら日本人がいろいろな自然のものとコミュニケーションを取ろうとした努力の一つの表れのような気もしますね。

先ほどおっしゃっていた怪談の話が出ましたけれども、怪談が最近はものすごくブームになっていて、というのはしゃべる人がものすごく増えたのです。それはコロナ禍の時に、皆さんも多分ちょっと聞いたことあると思いますが、「Clubhouse」というのをご存じですか。おしゃべりできるアプリ。今は「Spaces」といってツイッターに似たような機能ができたのですが、そこで怪談語りをする人が非常に増えたのです。それもこんな感じで何か演台に出て誰かがしゃべるというのではなくて好きな人が、はい、私もこんな話ありますというので怪談で交流するというのがたくさんあって、そこで語る人が一気に増えて、先ほどお配りしたチラシを皆さんお持ちいただいたと思いますけれども、カラーの黄色いチラシ……。

山崎　カラーのチラシ、ちょっと見ていただければありがたいなと思います。

河野　それは３つの商店街でまちおこしのイベントをしようという時に何かありませんかと聞かれて駄目もとで怪談どうですかと言ったら職員さんにものすごく怪談好きの人がいてストレートに通ったというものです。そこにいろいろな方が載っていると思いますけれども、そこに載っている方たちはほとんどコロナ禍でClubhouse や Spaces、YouTube、YouTube のチャンネル開設もすごく増えましたね。何か物語を語る期間としてコロナ禍というのは非常に

そういうのが熟成された期間でもあると思うので、確かに物語を必要としている人とそれを語る人がたくさん生まれた期間のような気がします。怪談もそれの副産物のような気がしますね。

山崎　私、学生時代を振り返ると、合宿行くと夜中の3時ぐらいに必ずみんな怖い話をしているのですね。あれ、何だったのでしょうね。何か必ずしゃべれる人がいるのですね。20人ぐらいゼミ生がいると。

河野　稲川淳二さんがおっしゃっていたのですが、怪談はちょっと暗いとかネガティブなイメージが結構あるかもしれないですけれども、怪談を語る時は修学旅行に行った時や何か飲み会の席とかみんなで楽しく盛り上がっている時に……。

山崎　超ハイな時ですね。

河野　だから、彼女に振られたから怪談でも聞こうとかはなかなかならなくて、ハイになって楽しい時に聞くものだからポジティブなものだとおっしゃっていましたけれども、何かちょっとそういうのがあるのかもしれないですね。

山崎　怪談花盛りというお話を伺うと、ある意味コロナの、コロナと何でも結びつけるのも変なので、あえて社会の閉塞感というふうに広く言いますけれども、閉塞感の中でもやけっぱちみたいな感じで怪談を楽しんでいるというところもあるのかもしれないですね。

河野　今は優勝賞金100万円の怪談のコンテストみたいなのがいっぱいあります。なので、これで一山当ててやろうという人がちょっと怪談を集めてやってもらうといいかもしれないですね。

山崎　怖い話というのは何がモチーフなのですか。妖怪は結構自然の産物あるいは何か不思議な出来事みたいなものが立体になって出てくるというのですが、怖い話というのはこの2023年、どんな傾向があるのですか。

河野　でも不思議な話みたいな、よく分からなかったみたいな話が結構あって、ものすごくかいつまんで簡単に言うと、僕と同じ年ぐらいの方が子供の時にピアノ教室に通っていたと。その日は結構うまく弾けたので先生が褒めてくれて、これ、ご褒美だよと言って飴をくれるのですね。グレープ味の飴をくれて、それをポケットに入れて、帰ります、ありがとうございましたと言ってピアノ教室からおうちに帰るまで10分ぐらい歩いて途中で、そうだ、飴もらったから飴食べながら帰ろうということでポケットをまさぐるのだけれども、飴がない。せっかくもらったのになくしてしまった、残念と思って家へがらがら、ただいまと言って玄関開けると玄関の靴を脱ぐところにその飴玉がぽつんと落ちていて唾液が付いていたという話があったりして。何か正体不明のよく分からない体験をしたという人たちが結構いるので、こういう話をしながらみんなできゃっきゃっと盛り上がっているというのが一つの怪談の楽しみ方ですね。

山崎　怪談つながりでちょっと（オンラインで）質問が来ているのですが、怪談つながりではないですね。河野先生は妖怪や幽霊の存在を信じていますかという質問が届いているのですが。

河野　信じていますかというのは、例えば本などに載っているその形のままこの世に実在しているかどうかということですね。

山崎　多分そういうことだと思います。

河野　調べるとなかなかそうはならんやろうみたいなことが多いのですが、実際に僕も怪談話を人から集めて人前で話すということをしているので、何か分からないけれども、そういう不思議なものを見聞きしたということはいまだにあるのかもしれないけれども、それが死者の霊であるとか妖怪であるというところまでは確証が持てないので、何となく不思議なものがいるかもしれないし、いたら楽しいなぐらいのスタンスです。

山崎　先ほどニューメキシコでしたか、エキシビションされたということですけれども、日本の妖怪と欧米によくいる悪魔あるいは悪霊、それから私もこれ、ちょっと気になったのですが、ゾンビというのと同じなのかと。出てきた、人々が発想したのというのは似たようなところがあるのでしょうか。

河野　そういう不思議な存在というか、そういうものは日本の妖怪だけではなくて世界中にあるのですが、僕はアメリカにいて傾向が一つ分かったことがあって、アメリカのニューメキシコに行った時に「この地元で昔から語られている、そういうお話はないですか」と聞いたのです。「あります」と現地の人がおっしゃってくださって、「ラ・ヨローナというやつが出ます」と。ラ・ヨローナ、スペイン語ですけれども「泣く女」という意味だそうです。これは旦那さんに裏切られて悲しみのあまりに死んでしまった女の人の霊みたいな意味だそうです、ラ・ヨローナ。

何をするかというと、サンタフェという町は雨期と乾期がはっきりと分かれていて、乾期の時は川に水一滴流れていないけれども、雨期になると大雨が降って川に水が流れだすと。川に水が流れだすと子供たちが川遊びをするのだけれども、その時はラ・ヨローナが出るというふうに言われていて、誰もいない水辺で女性の泣き声が聞こえるとか、川で泳いでいるとラ・ヨローナが川の中から足を引っ張るとか、あとは川で泳いでいる時にラ・ヨローナが男の子に印を付けて、その印を付けられた子のことを夜中に迎えにいくという存在であると。そういうラ・ヨローナの話を聞いて「あっ」と思ったのですが、日本にも似たような妖怪がいるんです。誰もいない川辺で泣き声をさせる、これは女性ではなくて赤ちゃんなのですが、赤ん坊の泣き声がする「川赤子」というのがいます。川で泳いでいたら足を引っ張る、これはカッパですね。日中目印を付けて夜迎えに行く、これは「ウブメ」という妖怪がいるのですが、思ったのは日本だと３体の妖怪が分業していることを、アメリカのラ・ヨローナさんは一人で全部してしまうのですね。

山崎　それは大変だ。

河野　日本は分業形式なので、ものすごく数が多いのです。だから砂をかけるだけのおばあさんとかアズキを洗うだけのおじさんとかそういう専業でずっとやる妖怪が多いので数が多いけれども、欧米のそういう妖怪的な存在というのは一人で何でもするので、そんなに種類がいないということを発見しました。逆に言えば砂をかけるだけのおばあさんというだけでも一応存在を認めて妖怪としてカウントしてあげるというのがちょっと日本人の気質の違いが出ているのかなという感じがします。

山崎　一つ一つの現象に対して目を向けて意識が向けられるという感じです

かね。

河野　あとはそういうものでも一応認めてあげるというところがあるのかもしれないですね。あとはゾンビは完全に映画の影響ですね。遺体が動くとかというのは本物のゾンビといいますか、伝承の中のゾンビはそんなのではないので完全に映画のポップカルチャーの影響という感じですね。

山崎　ゾンビ映画など見ていると最初から殺意100％背負っているような感じがして、日本の妖怪は、私はどちらかというと水木しげる世代なので鬼太郎のことしか頭にほとんどなかったのですが、日本の妖怪はあんまり人を殺意100％背負ってうりゃーっという感じがしないですけれども。

河野　人食うやつとかもいますけれども、でも何かイメージとして基本的にそういうものは姿形とかが見えないもので、日本の場合はそれを無理やり絵に描いているというところが海外とは違う事情があって、妖怪的なものを造形化した多分元祖の作品は先ほど見てもらった「百鬼夜行絵巻」だと思うのです。あれが室町期に描かれたもので、あれが妖怪画の元祖だと思うのですが、ああやって異形のものが集まって何かお祭り行列をしているとか夜は墓場で運動会とか。

山崎　楽しそうですよね。

河野　だから、あまり陰惨な感じにならなくて、ちょっと怖いけれども、楽しそうというイメージが妖怪には根強くあるのではないかというふうに思います。

山崎　妖怪には妖怪の世界があるという、そんな感じですかね。

あとは妖怪やお化けは不思議な自然現象、カマイタチとかそうですね。自然現象を具現化したみたいなところがあるのですが、それで何となくみんなで共有して楽しんでいる感じがするけれども、怖い話の楽しさは何ですかと質問が（オンラインで）来ています。怖い話をすると、なぜ楽しいのか。

河野　なぜ楽しいのでしょうね。でもホラー映画などお好きな方も多分おられると思いますけれども、ちょっと完全な安全圏から怖いものを見るのは楽しくないですか。自分が当事者だとちょっと嫌だけれども、話だけだったら絶対に何かあることはないですね。そういう安全を確保された上でスリルを体験できるというのでジェットコースターなどと似た感じがしますね。

山崎　ジェットコースターは自分の身を挺してスリルを楽しみますけれども。

河野　一応安全バーがあるからというところがあると思うので、何か安全確保した上でちょっと怖いものに近づきたいという気持ちと、それも一人で聞いているよりも先ほどの修学旅行の話ではないですけれども、みんなで一つの感動を共有できるというのは楽しいですね。お化け屋敷なども一人で行かないですね。みんなでわーっ、きゃーっと叫ぶのが楽しいので、それが一つの怪談の楽しみ方ではないかなというふうに思いますけれども。

山崎　『貞子』という映画ありますよね。私は以前、あれの音楽を作っている人のインタビューをしたことがあって、すごくたくさんホラーのBGMを作っているのです。なぜホラーをこんなにやっているのですかと言ったらホラーの現場は楽しくてたまらないのですと言っていました。

河野　らしいですね。大爆笑らしいです

よ。

山崎　ひたすら笑っていられると言って。だから大河ドラマなどより全然楽しいですみたいな。それもどこで怖がらせるのかとかを集団で作る楽しさみたいなところがあるのかもしれないですね。

河野　ホラー映画の要素の７割、８割は音楽やBGMらしいです。だから耳の不自由な方が字幕で映画など見られますけれども、ホラーは全然入ってこないそうです。不協和音などの音が非常に恐怖を駆り立てるので音楽の要素がとても強くて。昔、「ニコニコ動画」でMAD映像を上げている人がいてホラー映画のジェイソンとかが出てきて人をばっと切るところありますね。あれは本当はすごく不協和音の音楽とか入れるのですが、そのBGMを全部『必殺仕事人』にするという動画があって。

山崎　「ニコニコ」ならではの。

河野　そうやると全然怖くなくなるのです。そういうことでホラー映画も結構BGMは大事ですね。

山崎　学生さんから質問が来ています。なぜ妖怪を専門に学び始めましたか。

河野　男の子とか結構好きだと思うのです、妖怪とか電車とか。僕もそれと同じように普通に好きで、みんな卒業していくさなか、僕だけ卒業せず、いや、これ、まだ究めてないからというのでずっと好きでい続けたという感じです。

山崎　ずっと幼いころから何となく妖怪っぽいものが面白かった。

河野　あとは、ある程度大きくなってから小松和彦先生という方が書いた『京都魔界案内』という本があって、それを見たら今まで本の中とかフィクションの中の出来事だと思っていたお化けや妖怪のお話が京都のあらゆるところに伝説とか史跡として残っているという本を見て、それで何かすごくつながったみたいな、実際にあるかもしれないというところのワクワク感がよりそちらの方向に引っ張ってくれたという感じですね。

山崎　特にお勤めの大学の辺りは結構いろいろな名所とか妖怪スポットがたくさんありますね。

河野　葬りに来た場所ですから、そういう場所はいっぱいありますね。

山崎　あとは青坊主の質問が来ています。青坊主は近年、『学校の怪談』でも取り上げられているそうですけれども、なぜだと思われますかという。

河野　『学校の怪談』に青坊主が出てくるのですかね。青坊主は系統が２種類あって、一つは１つ目お化け、１つ目入道の絵に名前だけ青坊主と入れてある。色も付いていない無彩色で説明書きもないけれども、取りあえず１つ目入道のことを青坊主という系統が一つあると。

もう一つは、確か東北のほうの民話といいますか、説話の中に秋口に子供が夕方遅くまで遊んでいると麦畑から青坊主が飛び出してきて子供をさらうという話があります。なので、子供を脅かすための妖怪としての系譜と１つ目入道のビジュアルとしての系譜があるのですが、『学校の怪談』にそれが組み込まれるということは多分子供を脅す側のほうのお話がいろいろな事情で変化していって『学校の怪談』まで行き着いたところがあると思いますが、僕はお坊さんに実際に聞いたことがあるのですが、お坊さんの妖怪はなぜ多いのかという話をした時に、この青坊主の話をしたら青坊主という言葉自体は妖怪の名前ではなくてお坊さん用語としてあるそうです。

山崎　何でしょう。仏教系の学校に勤めていますけれども、青坊主は初耳です。

河野　お坊さん用語としてあって、というのは、髪の毛、基本的に昔の修行中は肉、魚とか食べられないですね。そうなってくると若い人でもどんどん髪の毛が茶色とか白になってくると。ところが、そういったものをもりもり食べていると人は髪の毛が黒いままだから髪を剃っても青々としていると。だから戒めを破るお坊さんのことを裏で青坊主というふうに呼んでいたということがあるので、もしかしたら不良坊主を妖怪として描いたものが系譜として一個あるのかも分からないですね。

山崎　いろいろ（質問が）来ましたね。先生が友達になりたい妖怪と知り合いにもなりたくない妖怪がいたら教えてくださいと。

河野　カッパは毎朝魚を届けてくれるそうなので。

山崎　素敵な方ですね。

河野　ただ、すごく玄関が生臭くなる、それは我慢しなければいけないというところがあるのですが、魚好きなので友達になりたいのはカッパですね。

知り合いになりたくないのは、実は座敷童子が。福の神的なすごくいい妖怪の代表格ではないですか。でも、あの子がおうちにいる間はすごく富栄えるのですが、いなくなるとしゃれにならない状態で没落する。家族みんな毒キノコにあたるとかいう話があったりするので、ちょっと最初から関わらないほうがいいなというので関わりたくないのは座敷童子ですね。

山崎　大変な思いするくらいなら最初からお近づきにならない……。

河野　生臭いのを我慢して、魚を届けてくれるほうがいいかなというふうに思います。

山崎　カッパというのは名前もいいですね、響きが。

いっぱい質問が来る。すごいな。妖怪を題材にしたアニメについての質問が来ています。アニメにも『ゲゲゲの鬼太郎』とか『ぬらりひょんの孫』とか『妖怪ウォッチ』などもそうですね。そこに出てくるキャラクター、アニメ化された妖怪たちとご自身が活動していて触れている妖怪とのギャップを感じることはありますかという質問です。

河野　特に感じるのは『鬼太郎』は第6期まであるのです。第1シーズンが白黒のころから始まって、つい4～5年ぐらいまであった第6期で10年周期ぐらいにアニメ化されるので、そのアニメの特徴などをその当時のはやっているものを取り込んでいるので絵柄が全然変わっていくというところが追っていくと面白いなというのがありますね。

山崎　最後、一番新しい時の猫娘のビジュアルに私はぎょっとしたのですが。

河野　すごくスタイルよくて。第5期のころの『鬼太郎』はアマビエちゃんが出てきます。このアマビエをものすごくかわいらしくキャラクター化しているので第5期の『鬼太郎』を探してもらえるといいかもしれないですね。

この前日本に来てくれた外国人の集団がいて日本の妖怪がすごく好きでといって何がきっかけで好きになったのですかと言ったら全員が『夏目友人帳』というアニメご存じですか。『夏目友人帳』が海外の女性の方に大人気で、それがすごく妖

怪ファンを増やしてくれているそうです。

山崎　夏目君ですね、男の子が妖怪見えるんでしたっけ。

河野　おばあちゃんがノートに妖怪のこといっぱい書いていてというやつですね。

山崎　日本でもちょっとアニメがブレークして結構息長く楽しまれてますね。

河野　思春期の揺れる男の子のお話みたいなのがすごく人気です。

山崎　アニメ化される妖怪さんとアニメ化されない妖怪さんというのがいると思うのですね。

河野　なかなか昔からの古典絵画とかにあるものをそのままキャラクターにしても他の人間のキャラクターとの食い合わせも悪いから、結構いろいろな現代風にデザインをアレンジして登場させることが多いですね。でも、それは見ながら僕は感心しますね。こういうふうに解釈してこう持っていくのかというのは感心するので、そういうのは結構好んで見ます。

山崎　割と肯定的というか、そんな感じですね。

河野　ばんばんやってくれたほうがいいと思いますね。

山崎　ありがとうございます。いろいろ伺いたいこと、すごくたくさん来ていて取り上げたいけれども、ちょっと時間も結構押していますので、この辺で。ごめんなさい、質問を送ってくださった方、申し訳ありません。この辺でいったんお話は終わろうと思います。ありがとうございました。

せっかくですので、宣伝して帰ってください。

河野　多分チラシを受け取っていただいたと思いますけれども、2月11日と3月11日に商店街で怪談会を開きますので、もしよかったら私のツイッターなどを探してもらえたら行き着くと思うので、そこに詳細があると思いますけれども、ぜひちょっと今回のお話で興味持っていただけた方は怪談聞きに来ていただけたらなというのと、あと人前でこういう怪談話をする機会が多くて僕もネタがどんどん尽きていってしまうので、何かそういう変な話あるという人はぜひ、それも名刺のカードがまだありますので、そこのQRコードから怪談投稿フォームにつながるような仕様になっていますので、もしよろしかったら、そちらから投稿していただければ、とてもうれしいです。よろしくお願いします。

山崎　ありがとうございます。河野先生のツイッターですけれども、片仮名でコウノと妖怪ぐらいをキーワードに入れて検索されるとあっという間にたどり着けるかと思いますので、ぜひそちらもご覧になってみてください。よくSpacesなど開かれて活発にWeb上でも活動されていますので、イベントに実際行かなくても楽しめるかなと思います。

では時間が押していますので、今日はこの辺で終わろうと思います。河野先生、わざわざお越しいただきまして、そしてたくさんの話題提供、どうもありがとうございました。（拍手）

河野　ありがとうございました。